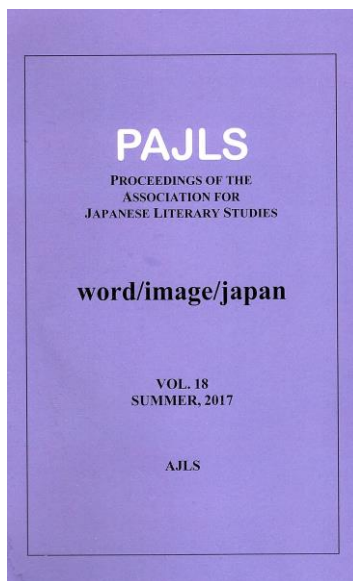


「古典文学は過去の遺物か—漫画を通した再生—」

“Classical Japanese Literature, A Relic of the Past? —Revitalization through Manga—”

Lindsey Stirek 

*Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies* 18 (2017): 176–187.



*PAJLS* 18:  
*word/image/japan*.  
Ed. Charlotte Eubanks, with Kyle Posey.

「古典文学は過去の遺物か – 漫画を通じた再生 –」  
**CLASSICAL JAPANESE LITERATURE,  
A RELIC OF THE PAST?  
–REVITALIZATION THROUGH MANGA–**

Lindsey Stirek  
*The Ohio State University*  
*Department of East Asian Languages and Literatures*

古典文学作品はそれが世に出て以降、現在に至るまで、小説、戯曲、絵画等の様々な形で翻案作品として再生されている。こうした作品を通して、一般の人々が古典文学に親しみを感じ、このことが『源氏物語』、『百人一首』などの作品が千年以上にわたって、評価されることに繋がっている。近年、「漫画」という形の翻案作品を通して古典文学に触れるという現象が広がっている。この現象を古典文学に関する知識という点から疑問視する研究者がいるが、「知識」を重要視するあまり一般の読者を排除することは古典文学作品の生命を失わせることになるのではないだろうか。

歴史を振り返れば、翻案作品によってそれぞれの時代の人々が古典文学に触れることで、作品に関する知識が積み重ねられてきた。この最先端が現代の「漫画」である。「漫画」を研究者の専門的な知識と比較し、それを完全に反映していないと批判することには意味がない。それぞれの時代の人々が一般の読者として、翻案作品に触れ、古典文学を知ることによって古典文学に対する意識は継続してきたからである。一般の人々が「ある作品を認識すること」がその作品の存続には欠かせない。それゆえ、「漫画」に「古典作品を知るための媒体」としての力があることを軽んじるべきではない。むしろ、漫画の「古典文学作品に対する認識を促す」力を探り、検討すべきではないだろうか。

現在、日本では、古典文学を原作とする漫画が高い人気を得ているが、文学と絵の結び付きは古くからの現象であり、鎌倉時代以前から文学は絵と結ばれていた。これを代表するのが『源氏物語』、『百人一首』である。12世紀に描かれた『源氏物語絵巻』は『源氏物語』と大和絵を結びつけた最も古い現存翻案作品である。江戸時代になるとその伝統は武家によって受け継がれ、婚礼調度品には源氏物語写本と絵巻、そして『百人一首』の貝合

## A RELIC OF THE PAST?

わせなどが含まれていた。徳川美術館所蔵の1600年代に作られた初音絵巻の調度類はその一つの例である。<sup>172</sup>

屏風絵にも『百人一首』、『源氏物語』を題材とした作品が多い。『源氏物語』を題材とした屏風は江戸時代前期から残っており、『百人一首』の場合は、名所絵と深い繋がりを持ち、室町時代以前からその伝統が続いている。<sup>173</sup> また、かるたの札とその絵は尾形光琳などの画家によって描かれたが、<sup>174</sup> 札に限らず、屏風にもかるた札のモチーフが頻繁に用いられていた。<sup>175</sup> このような現象の現代化が、古典文学を下敷きにした「漫画」と言えるのではないだろうか。

では、翻案作品と原作である古典作品とはどのような関係にあるのだろうか。例として、『修紫田舎源氏』を取り上げたい。この作品は江戸時代に人気を得たが、絵と文を組み合わせた『源氏物語』のパロディーである。<sup>176</sup> パロディーというジャンルは原作に関する何らかの知識を前提とし、その前提に基づいて筋立てを少しずつすることで面白さを創作する。作品自体の面白さもあるだろうが、「庶民」といわれる社会階層の人々でも、その原作を知っているからこそ、パロディー作品が成り立つのである。『修紫田舎源氏』が人気を得たということは、『源氏物語』自体もその時にかなり知られていたことを示している。『伊勢物語』のパロディー『仁勢物語』も同じくその作品に関する認識が存在していたことを示す。

また、能や歌舞伎では『源氏物語』、『百人一首』、『枕草子』などの作品に対する言及がよく見られる。能『松風』は『百人一首』に含まれる

立ちわかれ稲葉の山の峰に生ふる  
松としきかば今かへりこむ

---

<sup>172</sup> 徳川美術館。「第5展示室 大名の雅び」名品コレクション展示室、<http://www.tokugawa-art-museum.jp/exhibits/collection/room5/>.

<sup>173</sup> Machotka, Ewa. *Visual Genesis of Japanese National Identity: Hokusai's Hyakunin Isshu*. P.I.E. Peter Lang. 2009, pp.192

<sup>174</sup> NHK。「バックナンバー File76 かるた」美の壺、<http://www.nhk.or.jp/tsubo/arc-20080118.html>.

<sup>175</sup> Machotka, Ewa. *Visual Genesis of Japanese National Identity: Hokusai's Hyakunin Isshu*. P.I.E. Peter Lang. 2009, pp.45

<sup>176</sup> Emmerich, Michael. "The Splendor of Hybridity: Image and Text in Ryūtei Tanehiko's *Inaka Genji*." In Shirane, *Envisioning the Tale of Genji: Media, Gender, and Cultural Production*, 2008, pp. 211-239.

という和歌を中心として作られている。<sup>177</sup> 清少納言、小野小町、在原業平などの古典文学の作者も能、歌舞伎、文楽の舞台で、登場人物として現れる、あるいは、その作品である和歌が言及されることがある。舞台、芸能での言及が人物、作品を認識することに繋がるであろう。このことが示すのは、翻案作品と、その原作に対する何らかの認識に相互関係が存在することである。「原作に対する認識が翻案作品創作に結びつく」、「翻案作品の人气が原作に対する認識をもたらす」という関係がここに成立しているのではないだろうか。

さらに、古典文学は文学作品、舞台作品などの翻案に限らず、江戸時代に栄えた茶道、香道等の伝統文化とも深く結び付いている。茶道では和歌に基づいた季節を感じさせる掛け軸、茶道具の銘、絵柄等があり、香道には源氏香という複雑な遊びがある。これも古典文学の普遍性を示すのではないだろうか。

このように千年以上にわたって、古典文学の作品は何回も翻案、再生されている。だからこそ、今でも一般読者がその作品を意識しているのだ。では、現在はどうのようにその意識が再生産されているのだろうか。

現在、顕著な再生産の手段の一つは古典文学を元とした漫画、アニメなどの、いわゆるポップカルチャーである。学校で教科として古典文学を学ぶ場合は「読まなければならない」ものになるが、ポップカルチャーの中の古典文学は娯楽として、つまり「読みたい」という気持ちを起こさせるものになる。確かに、勉強向けの古典文学に関する漫画も多い。しかし、その勉強向けジャンル以外に、古典文学を取り上げた作品が多数ある。ここからは、『小倉百人一首』・『源氏物語』に基づく漫画を検討し、漫画が文学の世界でどのような役割を果たしているのか、また、漫画と文学はどのように結び付いているのかという問いを探る。

まず、『百人一首』をめぐる漫画を検討したい。

漫画『ちはやふる』は 2007 年に初版が刊行され、<sup>178</sup> 近年高い評価、人気を得ている。この漫画は「ちはや」という高校生の女主人公が百人一首競技かるたクイーンになるための競い合い

---

<sup>177</sup> 小山弘志、佐藤喜久雄、佐藤健一郎。「松風」謡曲集一、小学館、1973。361-375頁

<sup>178</sup> Nippon TV。「イントロダクション」ちはやふる、<http://www.ntv.co.jp/chihayafuru/intro/index.html>.

## A RELIC OF THE PAST?

を主要な筋立てとするが、彼女とかるた部員の関係も描写されている。競技かるたが主であることから、『ちはやふる』はスポーツ漫画ジャンルとされるが、少女漫画ジャンルにも属し、<sup>179</sup> その物語構造、作画の特徴などから「少女向け」といえるだろう。

現在までの累計発行部数は1700万部にのぼり<sup>180</sup>、同シリーズはまだ連載中である。2011年にアニメ化され、2012年に第二クールが放映された。<sup>181</sup> 作者末次由紀は小説、ガイドブック、かるた暗記カードも制作している。また、2016年に『ちはやふる 上の句』と『ちはやふる 下の句』という二部作映画が公開された。『上の句』の累計観客数は117万人、興行収入は約13億9000万円だった。<sup>182</sup> 2017年に続編が制作されるということが『下の句』の初日舞台挨拶で発表された。<sup>183</sup>

この人気は社会的に注目されるようになった。最近、朝日新聞、産経WESTなどの全国紙、あるいは様々な地方紙が競技かるたの人気を取り上げていて、特に学生に人気を得ていること、競技参加希望人数の増加を述べている。<sup>184</sup> 全日本カルタ協会によると正会員の人数はグラフAに見るように増加している。また、グラフBを見ると、大会の参加者の人数も増加していることが分かる。一月の名人／クイーン戦はテレビで放映され、インターネットでも視聴された。<sup>185</sup> 2016年の八月末にYouTubeに投稿された

---

<sup>179</sup> 様々な本店の整理によること

<sup>180</sup> 講談社、電話、2016年7月23日。

<sup>181</sup> Nippon TV。「INFORMATION」ちはやふる2、  
<http://www.ntv.co.jp/chihayafuru2/news/index.html>。

<sup>182</sup> 映画.com速報。「広瀬すず涙腺崩壊「ちはやふる」続編制作サプライズ発表で号泣」映画.com、2016年4月29日。  
<http://eiga.com/news/20160429/10/>。

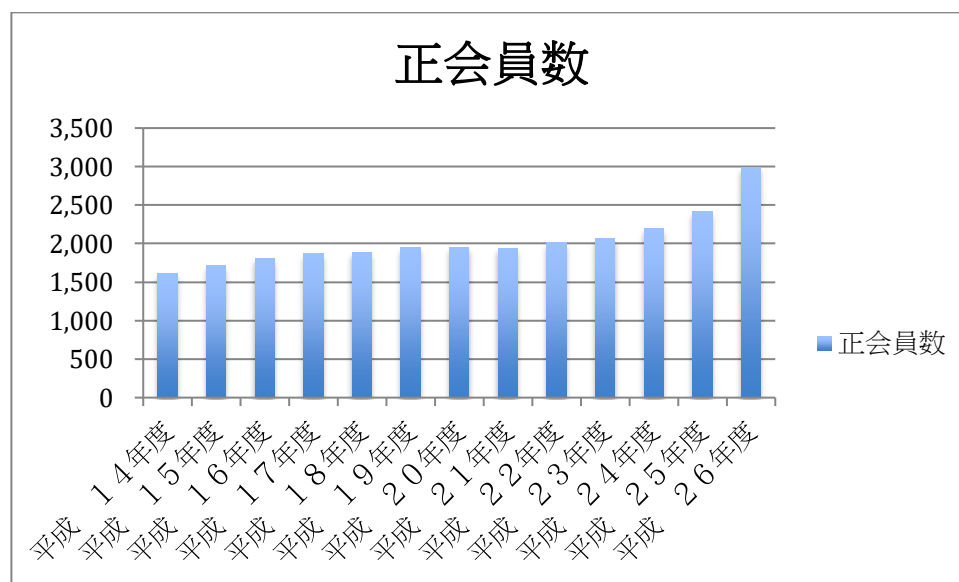
<sup>183</sup> 映画.com速報。「広瀬すず涙腺崩壊「ちはやふる」続編制作サプライズ発表で号泣」映画.com、2016年4月29日。  
<http://eiga.com/news/20160429/10/>。

<sup>184</sup> 参考：

<http://www.sankei.com/west/news/140222/wst1402220083-n2.html>、  
<http://www.jomo-news.co.jp/ns/8814645342736363/news.html>、  
<http://www.asahi.com/articles/DA3S12364150.html>。

<sup>185</sup> 全日本カルタ協会、メール、2016年7月27日。

「競技かるた第 60 期クイーン戦第 2 回戦 2016」は 158,600 ビュ  
アアを超えている。<sup>186</sup>



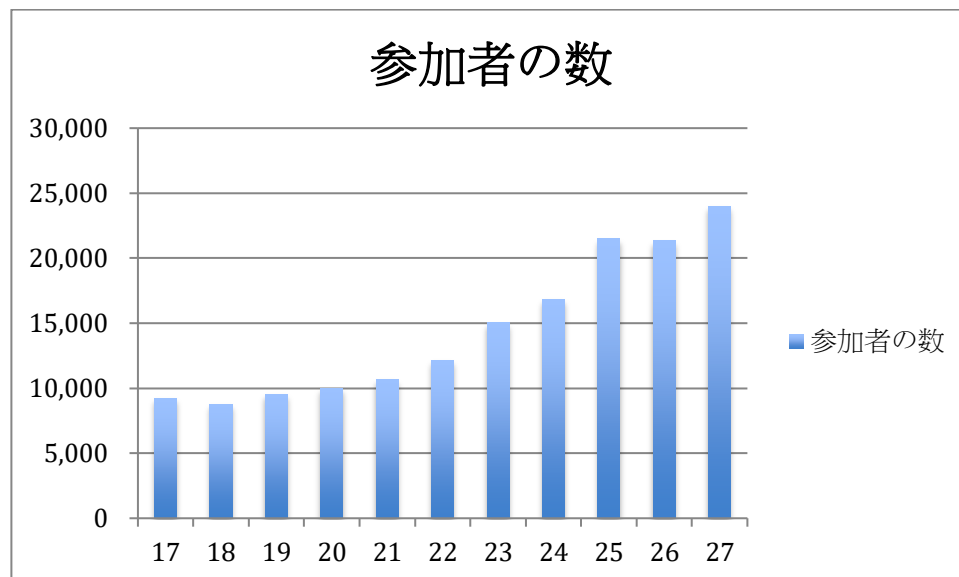
グラフ A<sup>187</sup>

<sup>186</sup> Brown Karuta。「競技かるた第 60 期クイーン戦第 2 回戦  
2016」Youtube、2016年1月10日。

<<https://www.youtube.com/watch?v=oELt0mRfd-Q&t=2865s>>

<sup>187</sup> 全日本カルタ協会、「年度別 会員増減表 H8～.xls」  
メール、2016年7月28日。

## A RELIC OF THE PAST?



グラフ B<sup>188</sup>

漫画『超訳百人一首うた恋い』は 2010 年に出版された。<sup>189</sup> 時代設定は『ちはやふる』と異なり、平安時代で、歴史的なエッセイコミックというジャンルとされる。<sup>190</sup> だが、詳細がフィクション化され、恋愛関係が主なテーマであること、作画の特徴から女性向けとされている。物語は『百人一首』を通じた歌人の生活と恋愛関係について展開する。『うた恋い』は 2012 年にアニメ化された。<sup>191</sup> 『うた恋い』とそのサブシリーズの累計発行部数は 80 万部である。<sup>192</sup>

次に『源氏物語』をめぐる漫画を検討したい。

---

<sup>188</sup> 全日本カルタ協会、「大会参加者一覧 2005～2015.xls」メール、2016年7月28日。

<sup>189</sup> メディアファクトリー。「INTRODUCTION」うた恋い、<http://utakoi.jp/intro/index.html>。

<sup>190</sup> 様々な本店の整理によること

<sup>191</sup> テレビ東京。「これまでのお話 EPISODES」超訳百人一首うた恋い、<http://www.tv-tokyo.co.jp/anime/utakoi/episodes/episodes01/index.html#131251>。

<sup>192</sup> メディアファクトリー、電話、2016年7月21日。

大和和紀作『あさきゆめみし』は1980年から1993年まで、13年にわたって、連載された、『源氏物語』に基づく漫画である。<sup>193</sup> 平安時代に設定されているが、恋愛関係を中心とした、少女漫画とされる。累計発行部数は『ちはやふる』と同様、1700万部超にのぼっている。<sup>194</sup> 2000年に宝塚歌劇団、NHKエンタープライズによって舞台化、実写映画化され、同年三月にテレビで放映された。<sup>195</sup> 『あさきゆめみし』に基づく『源氏物語千年紀』というアニメが企画されたが、実現せず、同タイトルで『源氏物語』を原作とするアニメが制作された。<sup>196</sup>

ここまでは少女、女性向け漫画を論じたが、それ以外にも、例えば、おおまかに『源氏物語』の筋立てに沿った『源君物語』という青年向けエロチック漫画がある。登場人物は『源氏物語』に基づいているが、設定は現代である。この漫画は集英社の『週刊ヤングジャンプ』に2011年より連載中である。<sup>197</sup> 累計発行部数は100万部を超えている。<sup>198</sup> 青年向けエロチック漫画というジャンルは少女、少年漫画の人気には及ばないが、人気がないともいえない。八刷で100万部を超えたことはかなりの人気を示している。

この漫画が『源氏物語』を下敷きにしていることは、『修紫田舎源氏』と同様の構図を示すものである。つまり、原作に対する認識が作品をより興味を引くものとしているということだ。

同様の構図を示すものに、漫画『もしも紫式部が大企業のOLだったなら』がある。一般社会人向けで、タイトル通り、紫式部、清少納言、在原業平などの歌人がオフィスで働けばという架空のコメディである。この漫画の読者層はかなり限定されるだろうが、このような漫画がコメディとして成立することは、先に述べたパロディー『修紫田舎源氏』のように、ある程度読者の原作認識に依存している。累計発行部数は9,750部である。<sup>199</sup>

<sup>193</sup> 講談社、電話、2016年7月23日。

<sup>194</sup> 講談社、電話、2016年7月23日。

<sup>195</sup> 立石和仁。「ビデオ」源氏物語加工文化データベース、<http://genjiculturedb.in.coocan.jp/video.htm>。

<sup>196</sup> 立石和仁。「マンガ、あさきゆめみし完全判」源氏物語加工文化データベース、<http://genjiculturedb.in.coocan.jp/manga.htm>。

<sup>197</sup> 集英社、電話、2016年7月27日。

<sup>198</sup> 『週刊ヤングジャンプ』、2016年13号、279頁、集英社。

<sup>199</sup> 創元社、メール、2016年7月25日。



## A RELIC OF THE PAST?

発行部数が少ないといっても、このような漫画が出版されることは『源氏物語』に関する認識の普遍性を如実に示している。『源氏物語』に基づく翻案作品は漫画だけでなく、実写版映画、歌舞伎、宝塚、アニメ、テレビドラマ、ゲームなど、様々なジャンルに広がりを見せている。また、新たな現代語訳の試みも続いている。このことも作品の普遍性を裏付けるのではないだろうか。

『源氏物語』、『百人一首』以外の古典文学作品に基づく翻案は存在はするが、それほど人気が高いわけではない。原作に対する認識がこの二作品ほどないので、その認識を元にした広がり期待出来ず、翻案が少ないのはそのためであろう。しかし、中央公論新社の「マンガ日本の古典」シリーズや小学館の「マンガ古典文学」シリーズなどに教育向け漫画翻案には様々な作品が含まれ、『和泉式部日記』、『古事記』、『方丈記』などのあまり読まれていない作品もそのシリーズに含まれている。<sup>200</sup>

では、上に挙げたデータがどのような傾向を示すのかを探ろう。

漫画『ちはやふる』の人気の拡大と競技かるた人口の増加の相関は明白である。グラフを見れば、『ちはやふる』が出版された平成20年から、かるたをする、あるいは全日本かるた協会に入会する人数が増加していく。『ちはやふる』が競技人口の増加の直接的な原因だとは言えなくても、『ちはやふる』は競技かるたに対する意識を上げ、それがかるた人口に反映している。また、『百人一首』の原作本カバーに、『ちはやふる』のキャラクターを掲載し、『ちはやふる』ファンの興味を引く。つまり、『ちはやふる』は『百人一首』の評価、社会的認識に貢献していると言えよう。

漫画『超訳百人一首うた恋い』は原作を元にして歌人の生活をフィクション化する。読者に歌人である登場人物に対して親しみを感じさせ、興味を引きだそうとしているからであろう。登場人物の意思、気持ちを感じさせるように、今の時代の読者に分かりやすい、生活ストーリーを作って、それに古典作品を入れ込む。しかし、この漫画はファンサイトなどで高い評価を得ながら、『ちはやふる』の人気には及ばない。しかも、『百人一首』に対する意識、原作本の売り上げに影響があるかどうかのデータは得

---

<sup>200</sup> 中央公論新社。「中公文庫」

<http://www.chuko.co.jp/bunko/#>

られず、原作本のカバーとして用いられるようなこともない。つまり、『超訳百人一首うた恋い』は『百人一首』に対する認識に貢献しているかどうかは不明である。

漫画『あさきゆめみし』の場合、『超訳百人一首うた恋い』と同じく影響は測りにくいだが、累計発行部数を見れば、人気を得ていることは間違いない。『あさきゆめみし』は『源氏物語』の筋立てと登場人物に関して忠実とはいえ、強調されている点は違う。違いは恋愛関係と女主人公の視点の強調である。そのため、少女漫画という人気のジャンルに含まれる。加えて、原作の認知度の高さもあり、『あさきゆめみし』の人気は当然であろう。その原作に対する忠実さのため、教育材料として使われる場合もある。

漫画『あさきゆめみし』は出版された後、実写映画化、舞台化された。それから2009年にアニメ『源氏物語千年紀』が制作され、<sup>201</sup> その二年後、高山由紀子の小説『源氏物語千年の謎』が映画化された。<sup>202</sup> 『あさきゆめみし』は「『源氏物語』フィーバー」のきっかけとなったといえるだろう。確かに、それ以前にも『源氏物語』はよく知られていたが、『あさきゆめみし』の出版、実写映画化、関連アニメの放映によって、一般の人々の『源氏物語』に対する認識が高まり、それにつれて、より興味を引かれるようになったといえるのではないだろうか。

しかし、この認識の向上とともに原作に対する意識が高まったといえるだろうか。『あさきゆめみし』は原作世界に忠実なので、原作に対する認識は当然生じるだろう。だが、田中貴子は『古典文学（研究）「棒鱈」化計画』で、一般読者が翻案を読む時、「『源氏物語』を読んだ気になる」（50）恐れがあると述べている。<sup>203</sup> しかし、実際は原作を「読んだ気になる」というより、原作と翻案の違いが分からず、「内容は同じだ」と受け取っているのではないだろうか。『あさきゆめみし』の場合は全く同じだとは思わなくても、筋立て、人物の性格付けまで忠実だと思ってしまうと問題になるだろう。

<sup>201</sup> 立石和仁。「マンガ、あさきゆめみし完全判」源氏物語加工文化データベース、<http://genjiculturedb.in.coocan.jp/manga.htm>.

<sup>202</sup> 角川文庫。「源氏物語 千年の謎」Kadokawa, <http://www.kadokawa.co.jp/product/201101000509/>.

<sup>203</sup> 田中貴子。「古典文学（研究）「棒鱈」化計画」、『日本文学』57（4）、46-53頁、2008年

研究者は原作に忠実であることを評価する、いわゆる原典至上主義<sup>204</sup>であり、かつ詳細にわたって、当時、実際に、ある習慣が存在したかどうかなどに注目する。が、一般読者にそこまで求める必要はない。先述した「読んだ気になる」という思い込みに捕われず、翻案を一種の要約として捉え、原作の存在を認識するなら、翻案が原作に悪影響を与えるという批判は全く当たっていない。つまり、翻案を読んで、原作があるのだという意識を持つことを肯定的に受け止めるべきなのではないだろうか。

漫画『源君物語』は題名を少し変えれば、『源氏物語』に言及することは必要なくなる。漫画家がこのタイトルに決定したことには、理由がある。それは、漫画家には経済的な動機もアーティスティックな動機もあるということだ。この場合は『源氏物語』を原作とした漫画を描いたことで、何らかのアピールとなり、より売れるのではないかとということもあっただろう。つまり、現代でも高名な作品なので、『源氏物語』に言及すれば、自分の作品はそこからの影響を期待できるという意識である。

『源氏物語』、『百人一首』以外の古典文学作品に基づく翻案がどのような読者によって読まれているかという点、自分の古典文学に関する知識を深めたい、古典文学に触れたい読者である。ジャンルとしては人気がないので、一般の人はこのような漫画を手にする可能性は低い。つまり、継続的に人気を得ている古典作品と違って、読まれていない古典作品は大体教育向けと認識されている。この状態は「過去の遺物」と言えるのではないだろうか。

翻案という現象は古くから続いているが、古典文学研究者はどのような理由で、漫画、いわゆる現代の翻案、だけを否定的に捉えているのであろうか。江戸時代などの翻案は認めて、現代の漫画だけを批判するのはおかしいのではないだろうか。前述したように、時代時代の翻案作品と漫画は切断されたものではないのだ。目的は同じである：一般の人に平安時代の文学を再認識してもらうこと。

古典作品の翻案である漫画で、焦点が異なること、筋立てが変えられていることを批判する人々もいるだろうが、歴史を振り返ってみれば、「翻案」とは常にそうであったことが理解できる。そして特に、『源氏物語』、『百人一首』の場合は、原作を高校で読ませるためか、オリジナルが失なわれているというわけでは

---

<sup>204</sup> 田中貴子。「古典文学（研究）「棒鱈」化計画」、『日本文学』57（4）、46-53頁、2008年

ない。無理に原作を読ませなくても、読みたい場合は、簡単に手に入るものとなっている。翻案の存在は原作に危険であるどころか、翻案があるからこそ人々は古典文学を意識して、関心を持続させるのだ。古典作品は翻案が創作されることによって再生しているといえるのではないだろうか。

### 参考文献

Brown Karuta. 「競技かるた第 60 期クイーン戦第 2 回戦 2016」  
*Youtube* 2016 年 1 月 10 日 .  
<https://www.youtube.com/watch?v=oELt0mRfd-Q&t=2865s>

中央公論新社. 「中公文庫」 <http://www.chuko.co.jp/bunko/#>

映画.com 速報. 「広瀬すず涙腺崩壊「ちはやふる」続編制作  
サプライズ発表で号泣」 *映画.com*、2016 年 4 月 29  
日. <http://eiga.com/news/20160429/10/>.

Emmerich, Michael. “The Splendor of Hybridity: Image and Text  
in Ryūtei Tanehiko’s *Inaka Genji*.” In Shirane, *Envisioning the  
Tale of Genji: Media, Gender, and Cultural Production*, 2008,  
pp. 211-239.

立石和仁。源氏物語加工文化データベース、  
<http://genjiculturedb.in.coocan.jp/>.

角川文庫. 「源氏物語 千年の謎」 *Kadokawa*,  
<http://www.kadokawa.co.jp/product/201101000509/>.

小山弘志、佐藤喜久雄、佐藤健一郎。「松風」*謡曲集一*、  
小学館、1973.

Machotka, Ewa. *Visual Genesis of Japanese National Identity:  
Hokusai’s Hyakunin Isshu*. P.I.E. Peter Lang, 2009.

A RELIC OF THE PAST?

メディアファクトリー. 「INTRODUCTION」 うた恋い、  
<http://utakoi.jp/intro/index.html>.

NHK. 「バックナンバー File76 かるた」 美の壺、  
<http://www.nhk.or.jp/tsubo/arc-20080118.html>.

Nippon TV. 「イントロダクション」 ちはやふる、  
<http://www.ntv.co.jp/chihayafuru/intro/index.html>.

Nippon TV. 「INFORMATION」 ちはやふる 2、  
<http://www.ntv.co.jp/chihayafuru2/news/index.html>.

『週刊ヤングジャンプ』、2016年13号、279頁、  
集英社.

田中貴子. 「古典文学（研究）「棒鱈」化計画」、『日本文学』57（4）、46-53頁、2008年.

テレビ東京. 「これまでのお話 EPISODES」 超訳百人一首  
う た 恋 い 、 <http://www.tv-tokyo.co.jp/anime/utakoi/episodes/episodes01/index.html#131251>.

徳川美術館. 「第5展示室 大名の雅び」 名品コレクション  
展示室、<http://www.tokugawa-art-museum.jp/exhibits/collection/room5/>.

全日本カルタ協会. 「年度別 会員増減表 H8～.xls」 メール、2016年7月28日.

全日本カルタ協会. 「大会参加者一覧 2005～2015.xls」 メール、2016年7月28日.